2007筑波大学附属駒場論集47集

筑波大学生の「国語力」に関する意識調査

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
澤田　英輔・鹽谷　　健・須藤　　敬・関口　隆一
東城　徳幸・平田　知之・福田　　孝・石塚　　修（筑波大学）

筑波大学生の「国語力」に関する意識調査

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
澤田　英輔・鹽谷　　健・須藤　　敬
関口　隆一・平田　知之・福田　　孝
石塚　　修（筑波大学）

要約

本校国語科では、共同研究員である筑波大学の石塚修准教授、同じく筑波大学の塚田泰彦教授の協力を得て、2007年９月に、筑波大学生約300人を対象として、「国語力」についての意識調査を行った。その結果、中高の国語の授業における「書くこと」の充実を望む声が明らかになった。

キーワード：大学の「国語」教育　アンケート　書くこと

1　はじめに

近年、大学での「国語」の授業の存在が注目されている。実際には「国語」ではなく「言語表現」等と命名されることも多いその授業は、「論文を書く力が落ちた」「ゼミでの議論が上手くいかなくなった」大学生の実状に対応しようとするものであることが指摘され、この種の授業に対応するための、実用的な日本語を教える教科書も作成されている[1]。また、こうした流れは決して学力レベルの低い大学にとどまるものではなく、早稲田大学でも2008年度から新入生を対象に「日本語の文章講座」を導入するに至ったことが報道された[2]。

これらの動きは、裏を返せば、中高の国語の授業で学生達が何を身につけてこなかったかの表れでもある。大学新入生が、新入生として期待される水準に達しないがゆえに、リメディアル教育の一環として国語の授業が行われていると考えられる。

このような現状を受けて、大学で要求される国語力という観点から、中高の国語のカリキュラムを見直してみることは、極めて意義の大きなことである。それは、「大学全入時代」とも言われる今日においては、なおさら必要なこととなろう。本校国語科では、そのような観点から、大学における国語力に関して調査を行った。初年次の2006年度は、「国語」の授業を行っている筑波大学の石塚修氏と島田康行准教授にお話をうかがった[3]。それを受けて、２年次の2007年度には大学生のニーズを探るという観点から、大学生の「国語力」観をアンケート形式で調査した。本稿は、そのアンケートの結果を中心に報告する。

2　アンケートの概要

2.1　アンケートの概要

アンケートの主旨は、大学生が実際に必要だと感じている国語力を尋ね、またその観点から中高までの国語の授業について振り返ってもらう、というものである。彼らの現実の大学生活に、中高の国語の授業がどれだけ役に立っていると思われているのか。あるいは、どの部分が不足していると思われているのか。その実態を把握し、中高のカリキュラムの見直しにつなげることが狙いであった。

アンケート用紙の詳細については12ページの【資料１】を見ていただきたい。質問項目は、大きくわけて以下の３点である。

A Survey on Attitudes of the Students of Tsukuba University toward the Japanese Literacy

（1）大学生活において重要だと思う国語力（一覧より五つ選択）
（2）高校までの国語の授業で、大学生活において身についた国語力、役立っている授業（自由記述）
（3）高校時代までに身につけたかった国語力、やってほしかった授業（自由記述）

（1）については、「その他」まで含めると20にわたる選択肢を用意した。その中には、一般的には「これが国語力？」と思われるものも含めている。これは、「国語力」を広義で捉えて、できるだけ幅広い選択肢の中から五つ選んでもらうことを主眼としたためである。

（2）と（3）は、どちらも自由記述であり、この２つをあわせて高校までの国語教育の正負の側面を書いて貰うことを目的としたものである。ここでは、あえて「役立つ」という限定的で明確な表現を用いることで、大学生の意識の中で高校までの国語の授業がどのような位置づけにあるのかを探ろうとした。

なお、これらの質問はあくまで意識調査であり、高校までの国語の授業の現実を直接的に反映したものではない。実際には役に立っているのにそれが本人の意識に上らないということも、現実にはしばしばあるからである。
しかしながら、実際に大学で国語教育が必要となっている今日、やはりそこには中高までの段階で何かが不足していると考えるのが自然であるし、その際に当事者である学生・生徒のニーズを確認することは決して無益なことではない。そのような目的でなされたものであることを、あらためて断っておく。

2.2　調査の時期・規模

調査は、石塚修・塚田泰彦両氏の協力を得て行われた。2007年の９月５日と10日の二日間に実施され、筑波大学生298名より回答を得ることができた。この298名は様々な学群に所属しているのだが、大まかに分類すると、文系73名、理系64名、芸術系54名、体育系103名、不明５名となる。芸術系や体育系の多さが特徴となろう。

2.3　調査の限界

この調査には、あらかじめ教科内でも認められた大きな問題点がある。それは、社会調査の専門的訓練を受けた人間が教科内にいないということである。質問項目の立て方や対象の絞り方それ自体が、調査結果に影響してしまうことはよく知られたことであり、こうした問題を解決する専門的技術がないままでの調査の資料的価値は低いと言わざるをえない。

したがって、教科内では、調査結果はあくまでおおざっぱな傾向を表すもの程度に捉え、あまり細かな分析は行うべきではないとの見方が強く存在した。そのような限界があることもふまえて、以下にアンケート結果の報告を行う。

3　筑波大学生が重要だと思う国語力

3.1　全体的な選択傾向

最初の項目は、大学生が重要だと思う国語力について、20の選択肢の中から５つを選んでもらうものである。まず全体的な結果は、14ページの【図１】のようになった。

選択上位の項目を列挙すると、次のようになる。

10：論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を正確に伝える力（177名、59.4%）
12：相手にわかりやすく自分の考えや気持ちを話す力（164名、55.0%）
16：手紙・会話等の様々な場面で適切なマナーに則って対応する力（121名、40.6%）
3：評論や論文を速く読み、概要を把握する力（117名、39.3%）
7：その集団や場において、明言されない「空気」を読む力（111名、37.2%）
9：話し相手の心情を察しながら、丁寧に話を聞く力（111名、37.2%）

これらの項目を見て分かるのは、筑波大学生が重要な国語力と思っている力の多くが、アウトプットやコミュニケーションに関する力だということである。最も多い約６割の177名が選択したのは「論理的に書く力」。ついで「わかりやすく話す力」

や、おそらく敬語を中心とした対人マナーが続く。「読むこと」に属するのはその次の「速く読み、概要を把握する力」程度であり、その次にも「場の空気を読む力」「丁寧に話を聞く力」など、対人コミュニケーションに関する項目が続いていることがわかる。

一方で、調査前の段階である程度予想されたことではあるが、古典や書写に関する能力が重要だと思っている大学生は総じて少なく、以下のような結果になっている。

4：日本の古典文学や漢文学を読み、内容を深く味わう力（14）
18：日本の古典文学や漢文学についての知識・教養（14）
19：文字を硬筆や毛筆で丁寧に書く力（15）

古典文学が大学生活で重要でないと考えられるのは、大学生の現状を考えれば仕方のないことであろう。また、文字を書く力が軽視されているのも、実際に「書く」行為の多くがパソコンによってなされている現代社会の傾向を考えれば、仕方のないことと考えられる。

また、それぞれの選択の相関はどうなっているだろうか。それを表したのが14ページの【表１】である。特記すべき傾向は見あたらないが、中には顕著な相関を見せている選択肢も存在する。例えば「19：文字を硬筆や毛筆で丁寧に書く力」が重要だと思っている大学生の約６割が「16：手紙・会話等の様々な場面で適切なマナーに則って対応する力」を選び、約５割が「17：漢字をはじめとする語彙の知識」を選んでいる。このことから、大学生がこれら３つの国語力を関連したものだと捉えていることがわかる。

3.2　文系学生の選択傾向

次に、これらの結果を学生の専攻する分野別に見てみるとどうなるだろうか。まずは、文系の学生がどのような国語力を重視する傾向にあるのか、見てみよう。筑波大学は学群・学類制をとっているために明確に「文系」「理系」とわけることは難しいのだが、ここでは第一学群の社会学類、人文学類、第二学群の人間学類、日本語・日本文化学類、比較文化学類、第三学群の国際学類、図書館情報専門学群の所属者73名を「文系」として扱うことにしたい。

文系大学生の選択傾向は、【表２】（15ページ）の「文系」の項目のようになる。他分野の学生と比べて比較的指標が高い項目として、

2：評論や論文の論理展開を理解しながら丁寧に読む力（39名、53.9％）
10：論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を正確に伝える力（59名、80.8％）
11：会話やゼミでの討論において論理的に話を進める力（40名、54.8％）
18：日本の古典文学や漢文学についての知識・教養（8名、11.0％）

などがあげられるだろう。全体として、論理的に書く・話す行為を重視する傾向が強い。また、さすがにというべきか、日本の古典文学・漢文学の知識や教養に価値を認める生徒も、少数とはいえ他分野と比べると相対的に多かった。

3.3　理系学生の選択傾向

ついで、理系大学生の選択傾向を見てみよう。ここで「理系」と分類されたのは、第一学群の自然学類、第二学群の生物学類・生物資源学類、第三学群の工学システム学類に所属している64名である。

【表１】の「理系」の項目を見てみると、

2：評論や論文の論理展開を理解しながら丁寧に読む力（24名、37.5％）
10：論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を正確に伝える力（41名、64.1％）

などの論理性に関わる項目の数値が、文系ほどではないとはいえ、やはり比較的高水準を示している。また、特徴的なのが

13：パワーポイント等を用いて印象的なプレゼンテーションをする力（21名、32.8％）

の数値が他と比べて突出して高いことだろう。理系の学会発表やゼミでの発表の場において、どのような伝達手段が重視されているのかがうかがえる。

3.4　芸術系学生の選択傾向

続いて、「文系」「理系」以外に「芸術系」と「体育系」の学生の選択傾向を見てみよう。まず芸術系に分類されているのは、芸術専門学群54名である。

【表１】の「芸術」の項目を見ると、

１：小説や詩歌などの文学的文章を読み、深く味わう力（15名、27.8%）
６：様々な情報を自分自身の知識や経験をもとに捉え直す力（27名、50.0%）
12：相手にわかりやすく自分の考えや気持ちを話す力（33名、61.1%）

以上の三項目が全分野でトップの%数値を示している。これは、他の分野と比べて、芸術分野の特徴を反映していると言えるだろう。表現に関心の深い芸術分野の学生にとって「文学的文章に触れて感性を磨き、様々な情報を自分なりの視点で捉え、それをわかりやすく他者に伝える」という力が必要であることがよくわかる選択傾向である。

3.5　体育系学生の選択傾向

最後に、体育系学生の選択傾向を見てみる。体育専門学群の102名がこの分類に入り、人数だけで言えば今回の調査では最も多い。彼らに特徴的なのは、

７：その集団や場において、明言されない「空気」を読む力（50名、49.0%）
16：手紙・会話等の様々な場面で適切なマナーに則って対応する力（51名、50.0%）
17：漢字を始めとする語彙の知識（28名、27.5%）

といった項目を、他分野の学生に比べて多く選択していることだ。また、

19：文字を硬筆や毛筆で丁寧に書く力（10名、9.8%）

を選択する学生も、他分野の学生では1～2名にとどまっていたことを考えると、比較的多いと言える。

こうしたことから、体育系分野の学生はコミュニケーションや語彙など、比較的実用度の高い国語力が必要だと考えているようである。これは、この分野の学生が将来教員やコーチの立場で実際に人と関わる可能性が高いこととも無縁ではないだろう。

3.6　この節のまとめ

以上、全体の傾向からそれぞれの分野ごとの選択傾向に至るまで、筑波大学生が重要だと思う国語力について概観してきた。全体的傾向として言えることは、彼らが書く・話すといったアウトプットに属する国語力を重視していることである。また、各分野ごとの傾向の違いは確かに存在するので、これをもとにすれば、高校のレベルでは生徒の進路に応じた国語のきめこまかな指導なども模索できるはずである。

4　国語の授業への評価と要望

4.1　国語の授業への評価

アンケートでは、続いて自由記述形式で次の二点について質問している。

・高校までの国語の授業で、大学生活において身についた国語力、役立っている授業（自由記述）
・高校時代までに身につけたかった国語力、やってほしかった授業（自由記述）

これは、大学生活で必要とされている国語力を、高校までの国語の授業でどれだけ身につけることができているのか、あるいはいないのかを知るための質問であった。アンケート自体は自由記述で行われ、中には参考になる授業実践が具体的に書かれていた例も多いが、全体の傾向を見るために、ひとまずは内容に応じていくつかの項目に分類し、その結果を見ることにした。

まず、高校までの国語の授業で役に立った授業や身についた国語力を問う設問について見ていこう。結果は、【図２】16ページのようになる。

一見して、一番目立つのが「なし」という項目で、全体の44%（143名）を締めている。

ここまで多い理由は、問い方が「役に立った授業や身についた力があれば書いて欲しい」というスタンスだったため、「なし」と明記されたものだけではなく、空欄のまま返ってきたアンケートも「なかったから書かなかったのだ」と判断して「なし」に分類していることもある。しかし、143名

の内訳を書けば「なし」と明記したものが89名、空欄だったものが54名と、やはり圧倒的に「なし」が多いことには間違いない。高校までの国語の授業は、現在の自分には役に立っていない。そう判断している大学生が、割合の上からいけば圧倒的だと言える。もちろんこれは大学生の意識調査なのでそのまま実態を反映しているとは断言できないのだが、それでもこの「なし」という数値の高さが目立っている。

次いで多かったのは、次のような力や、それを身につける授業であった。

論理的な文章を読む・要約する	11%
小論文等を書く	11%
漢字・語彙	10%

いずれも実用的な文章作成や大学での論文の読み込みに必要なものであり、「役に立つ」ことが実感されやすい種類の力であるといえる。同様に役に立つことが実感されやすいはずの「議論や発表」に分類される授業の数値が低かったのは、そのようなスタイルの授業そのものが少数であるからかもしれない。また、文学作品の読解や創作、朗読などは、「役に立った」とは認識されにくいが、これは予想の範囲内と言える。

4.2 国語の授業への要望

次いで、高校までの国語でやって欲しかった授業や、身につけたかった力の項目を見てみよう。【図３】(16 ページ) を見ると、上位は次のような結果になる。

書く	30%
漢字・語彙	16%
読む	15%
話す・発表する	15%

「書く」ことへの期待が高く、30%と圧倒的な数値を出していることが注目される。次いで「漢字・語彙」が 16%、「読む」「話す・発表する」がそれぞれ 15%と続いている。

ちなみに、先の【図２】で「なし」と回答した44%の大学生に絞ってこの項目の回答を見ても、下のようにほぼ同じ結果が出ている。

書く	33%
漢字・語彙	16%
読む	15%
話す・発表する	13%

いずれにせよ、高校までの国語の授業で不足しているのは「書く」ことであり、またその力が現在の自分にも足りない――そう判断している大学生が、全体の３割程度存在することになる。

「書く」に次いで要望が多いのは漢字や語彙の指導であり、これは読み書きの双方に渡る問題であると言える。次いで「読む」「話す・発表する」といった内容が続く。ここで、アウトプットに類する「書く」と「話す・発表する」を合計すると約 45%に達する。こうした授業が高校までの国語に不足していたという大学生の声は、現状でもなお教師主導の一斉講義型の国語の授業が多いことをうかがわせる。

4.3 専攻分野別の結果

ところで、これらの結果を、ふたたび大学生の専攻分野別に見てみるとどうなるだろうか。それをまとめたのが 17 ページの【表３】である。

まず、「役に立った国語の授業」の項目を見ると、何といっても理系学生の 67.2%が「なし」と答えている点に目を奪われる。およそ７割近くの理系大学生に「国語は役に立たない」と思われているわけである。また、国語が比較的得意だったのではないかと予想される文系大学生にしても、54.8%の学生が「なし」と答えている点を重く見る必要があるだろう。

次に「やってほしかった授業」の項目を見てみよう。特に文系大学生から「書く」授業をやって欲しかったという要望が強く、約半数の 49.3%の学生がそう答えている。実際に論文やレポートを書く際に、その力の不足を感じている実態が浮かんでくる。

なお、他と比べてやや特徴的なのが、体育系の大学生が、「役に立った授業」「やってほしかった授業」ともに「語彙・漢字」指導をあげている点で、【表２】の結果とあわせても、この分野を専攻する学生に特徴的なニーズが存在すると考えられる。

5　アンケート総括

今回のアンケートの結果、わかったのは次のようなことである。

1．書く力・話す力など、アウトプットに類する力を重要な国語力だと思っている大学生が多い。
2．全体で４割以上、理系では７割近くの大学生が、高校までの国語の授業が役に立っていないと考えている。
3．３割の大学生が、「書く」指導の充実を国語の授業に望んでいる。
4．大学生の専攻により、必要とする国語力や、必要な国語の授業のあり方には違いがあることが認められる。

前述の通り調査者が社会調査の専門的訓練を受けていないが故の限界はあるが、今回の調査から、現在の国語の授業に何が不足しているのか、見えてくるものはあるのではないか。それは「書く」ことの指導である。もっと「書く」指導を充実させ、生徒が将来大学生になった際に十分に論文やレポートの執筆ができるような、「書く」基礎力を身につけさせる必要がある。逆に言えば、そのような努力をしない限り、いつまでたっても国語が「役に立たない」と考える大学生は減らないであろう。

また、大学生の専攻別に必要と思われている国語力に違いがあることもわかった。ただし、これについてはまだ調査が不充分であり、もっと精査することが必要である。しかし、その上で、例えば高校２年時や３年時に進路指導と並行して専攻別の少人数授業を組んだり、すでに推薦入学が決まっている学生に個別指導のような形で対応することが可能になるだろう。そのためにも、今後このような形での調査を充実させ、その上で生徒個々のニーズに応じた授業を考えていくことが必要となる。

6　「書く」指導の課題

6.1　「書くこと」の指導の困難

最後に、このアンケートの結果をもとに、大学での学びにつながるような中高の国語の授業のあり方について考えてみたい。

まず、大学生活までを見通した時に現在の国語の授業に不足しているのが「書くこと」の指導であることは、すでに見てきたとおりである。

しかし、ではなぜ不足しているのだろうか。これについては様々な理由が考えられる。

一つには、従来多くの学校で「書く」ことの指導が読書感想文や行事感想文などと連動することでなされていたため、書きはしても、その内容まで十分に指導されず、いわば「書かせっぱなし」に近い状態が多く見られることである。今回のアンケートでも、読書感想文が何のためにあるのかわからない、という大学生の意見が散見された。

また、教師が書くことの指導の必要性は感じていても、多忙な日々の中で個々の原稿を添削するだけの時間的ゆとりが存在しないことも、大きな理由の一つであろう。そのため、書いたものに一言二言の簡単なコメントをつけて返すにとどまったり、ひどい場合には検印を押すだけで返却したりしてしまうのである。これでは、いくら教師が「指導」をしたつもりでも、実際に書く能力が生徒につくことはありえない。

いまある程度「書く」指導が熱心に、そして体系的になされているのは、大学受験の小論文指導の場かもしれない。そこでは大学入試レベルの評論が課題文として出され、それを読んだ上で自分の意見を論理だてて主張することが求められる。そして、論理立てて主張するためのマニュアルもいくつか存在している。

たしかに受験小論文の対策には論理的に文章を書く上で役に立つものも少なくない。また、課題文を読むことで結果的に評論を読む力をつける契機にもなっている。実際にアンケートでも、小論文対策の授業が役に立ったという声が多く聞こえた。

しかし、一方でこのような受験小論文対策型の「書く」指導は、ともすると、テーマに応じた知識を暗記して、後は誰でも書ける無難な書き方のマニュアルに従えばそれでよい、という方向に流

れがちである。それで実際に生徒が考え、書く力を高めていることになるのか、という批判もされている[4]。

このように、「書くこと」の指導は、現在でも様々な課題を抱えている。

6.2 本校の取り組み

本校国語科では、これまでも「書くこと」の指導を重視し、自分の考えを書かせ、それを読み合う機会も多く設けてきた。しかしながら、その多くは生徒に課題を与えて、生徒が書いた結果としての作品を教師が添削したり、コメントしたり、クラスで共有したりするにとどまっていたきらいがある。すなわち、書く過程については充分な指導がなされていたとは言い難い面もあったのは事実であった。

今回のアンケートで、「書くこと」の指導の充実が求められていることを受け、現在、本校では新たな「書くこと」の指導にとりくんでいる。それは、生徒が書いてきたものを評価するだけではなく、長い時間をかけて生徒が一つの文章を書く、その過程に積極的に関わろうとするものである。

この試みは、2007 年 10 月より始まった、中学３年生のチャレンジ学習（後期）の時間で行われている。チャレンジ学習とは、本校の中学三年時に週１コマ行われている選択授業であり、生徒が個々の得意や不得意に応じて自由に科目を選択して少人数で行われるのが特徴となっている。

「書くこと」の指導の試みとして、このチャレンジ学習を選んだのには二つの理由がある。一つは、チャレンジ学習の後期が始まる 10 月が、ちょうどアンケート結果の大勢が判明していた時期であり、タイミングが一致したこと。そしてもう一つは、チャレンジ学習が少人数で行われるため、40 人学級で指導する前段階の、いわばテストケースとして位置づけることができることである。

今回は、全 20 名の中３生徒が国語のチャレンジ学習を希望し、この 20 名がさらに３名の教員により指導されることとなった。その人数の内訳は、

文学作品を書く（担当：須藤）	９名
作品論を書く（担当：東城）	４名
調べて書く（担当：澤田）	７名

となっている。いずれも「書くこと」の指導を行う点は一致しているが、書く内容に応じてクラスを分け、単に書いた結果を教員が添削するのではなく、生徒が文章を書く過程に関わり、それぞれについてきめ細かな指導をすることを目指している。

後期のチャレンジ学習は 2007 年 10 月 4 日～2008 年 2 月 28 日まで計 15 回行われる。原稿執筆時点ではまだ授業実践が続いている最中であり、その報告は機会があれば、また稿を改めて行うこととしたい。

【注釈】

1）たとえば、野田尚史・森口稔(2003)『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房　など。また、日本の大学における日本語表現能力育成の授業の概況については、大島弥生「日本国内の大学における日本語表現能力育成の概観」(科学研究費補助金研究成果報告書『大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：競合・協働的アプローチ』2005 年）や、『月刊国語教育研究』2002 年 2 月号小特集「大学における国語教育」に詳しい。

2）読売新聞 2007 年 10 月 19 日。

3）これについては 2006 年度教育研究会で報告した。また、筑波大学の「国語」の授業については石塚修「大学における「国語」教育はどのようになされるべきか」(『月刊国語教育研究』2002 年 2 月号）に記載がある。

4）その代表的なものとして、中井浩一による受験小論文のマニュアル化批判がある。

【参考文献】

1．石塚修(2002)　「大学における『国語』教育はどのようになされるべきか」『月刊国語教育研究』２月号、40-48 日本国語教育学会。

2．大島弥生 (2005)『大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：競合・協働的アプローチ』、11-18　科学研究費補助金研究成果報告書

3．中井浩一(2006)『脱マニュアル小論文』　大修館書店

4．日本国語教育学会 (2007)『アンケート調査報告書国語教育に関する教師の意識』

5．野田尚史・森口稔(2003)『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房。

【資料1—1】アンケート用紙(表面)

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

筑波大学生の「国語力」観に関する調査

「国語力」に関する以下の項目について、あなたの考えをお聞かせください。

選択式の回答は、該当箇所のマーク()を塗り潰してご回答ください。

() ：空白マークの例　　● ：正しい塗り潰しの例　　✓ ：不十分な塗り潰しの例

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。
この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

(1)　あなたのご所属学群・学類・専攻をお書きください。

(2)　あなたの年次をお選びください。

()1: 1年　()2: 2年　()3: 3年　()4: 4年

(3)　【５つ選択】以下の項目から、大学生活において重要だと思う国語力を５つお選びください。

()1: 小説や詩歌などの文学的文章を読み、深く味わう力

()2: 評論や論文の論理展開を理解しながら丁寧に読む力

()3: 評論や論文を速く読み、概要を把握する力

()4: 日本の古典文学や漢文学を読み、内容を深く味わう力

()5: テレビなどの映像情報を正確・批判的に見る力

()6: 様々な情報を自分自身の知識や体験をもとに捉え直す力

()7: その集団や場において、明言されない「空気」を読む力

()8: 人の話の内容を適切に要約する力

()9: 話し相手の心情を察しながら、丁寧に話を聞く力

()10:論文やレポートを論理的に書いて人に自分の主張を正確に伝える力

()11:会話やゼミでの討論において論理的に話を進める力

()12:相手にわかりやすく自分の考えや気持ちを話す力

()13:パワーポイント等を用いて印象的なプレゼンテーションをする力

()14:自分の主張や発表内容を簡潔にレジュメにまとめる力

()15:自分に解決可能な形で適切な問いをたてる力

()16:手紙・会話等の様々な場面で適切なマナーに則って対応する力

()17:漢字をはじめとする語彙の知識

()18:日本の古典文学や漢文学についての知識・教養

()19:文字を硬筆や毛筆で丁寧に書く力

()20:その他（自由記述）

1/2
調査07年09月

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

【資料1—2】アンケート用紙(裏面)

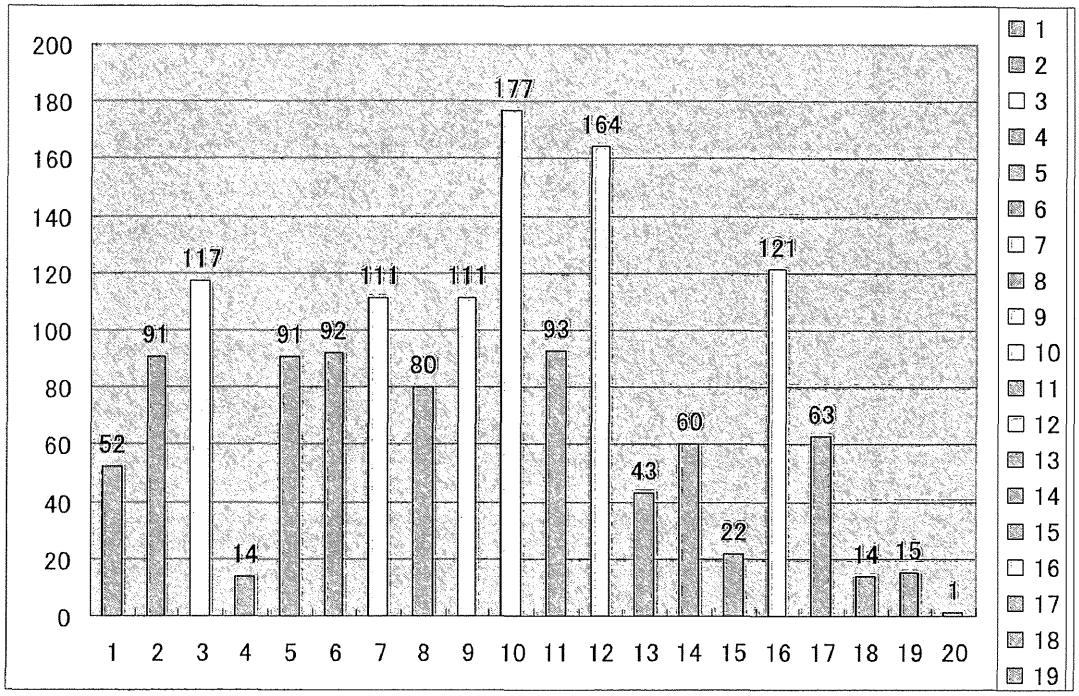
(4) 【自由記述】高校までの国語の授業のうち、あなたの力を伸ばし、大学生活においても役立っている授業はありますか。どんな授業で、どのような力が身についたのか、できるだけ具体的にお書きください。

(5) 【自由記述】現在からふりかえって、高校時代までに国語の授業で身につけておきたかった力や、やってほしかった授業はありますか。できるだけ具体的にお書きください。

調査結果は筑波大附属駒場中高等学校国語科の校内プロジェクト研究のために利用され、国語科が責任をもって管理いたします。ご協力ありがとうございました。

2/2
調査07年09月

【図1】「大学生が重要だと思う国語力」全体の傾向



【表1】重要だと思う国語力の相関関係

	選択人数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1	52		21.2	32.7	15.4	32.7	25.0	26.9	21.2	32.7	42.3	15.4	53.8	9.6	7.7	5.8	32.7	25.0	5.8	3.8	0.0
2	91	12.1		38.5	2.2	20.9	30.8	19.8	31.9	26.4	68.1	34.1	48.4	13.2	25.3	8.8	33.0	22.0	4.4	5.5	0.0
3	117	14.5	29.9		2.6	25.6	30.8	28.2	24.8	26.5	70.9	35.9	48.7	16.2	24.8	6.0	28.2	17.1	4.3	6.0	0.0
4	14	57.1	14.3	21.4		14.3	57.1	21.4	14.3	28.6	35.7	7.1	42.9	7.1	7.1	14.3	21.4	14.3	14.3	14.3	0.0
5	91	18.7	20.9	33.0	2.2		26.4	47.3	24.2	36.3	50.5	26.4	48.4	14.3	15.4	7.7	36.3	14.3	3.3	4.4	0.0
6	92	14.1	30.4	39.1	8.7	26.1		31.5	17.4	39.1	55.4	29.3	55.4	13.0	21.7	9.8	33.7	19.6	6.5	5.4	0.0
7	111	12.6	16.2	29.7	2.7	38.7	26.1		18.9	49.5	46.8	25.2	55.9	16.2	15.3	9.0	44.1	18.0	2.7	7.2	0.9
8	80	13.8	36.3	36.3	2.5	27.5	20.0	26.3		28.8	55.0	30.0	55.0	15.0	23.8	10.0	32.5	31.3	6.3	10.0	1.3
9	111	15.3	21.6	27.9	3.6	29.7	32.4	49.5	20.7		40.5	20.7	65.8	9.0	17.1	9.9	46.8	21.6	2.7	5.4	0.9
10	177	12.4	35.0	46.9	2.8	26.0	28.8	29.4	24.9	25.4		33.3	52.5	15.8	22.0	5.1	35.6	16.9	4.5	3.4	0.0
11	93	8.6	33.3	45.2	1.1	25.8	29.0	30.1	25.8	24.7	63.4		38.7	17.2	23.7	8.6	38.7	20.4	6.5	4.3	0.0
12	164	17.1	26.8	34.8	3.7	26.8	31.1	37.8	26.8	44.5	56.7	22.0		7.3	15.2	9.8	43.3	17.7	3.0	3.7	0.6
13	43	11.6	27.9	44.2	2.3	30.2	27.9	41.9	27.9	23.3	65.1	37.2	27.9		37.2	9.3	30.2	20.9	0.0	4.7	0.0
14	60	6.7	38.3	48.3	1.7	23.3	33.3	28.3	31.7	31.7	65.0	36.7	41.7	26.7		6.7	35.0	18.3	5.0	5.0	0.0
15	22	13.6	36.4	31.8	9.1	31.8	40.9	45.5	36.4	50.0	40.9	36.4	72.7	18.2	18.2		54.5	13.6	0.0	9.1	0.0
16	121	14.0	24.8	27.3	2.5	27.3	25.6	40.5	21.5	43.0	52.1	29.8	58.7	10.7	17.4	9.9		24.0	3.3	7.4	0.0
17	63	20.6	31.7	31.7	3.2	20.6	28.6	31.7	39.7	38.1	47.6	30.2	46.0	14.3	17.5	4.8	46.0		7.9	12.7	0.0
18	14	21.4	28.6	35.7	14.3	21.4	42.9	21.4	35.7	21.4	57.1	42.9	35.7	0.0	21.4	0.0	28.6	35.7		21.4	0.0
19	15	13.3	33.3	46.7	13.3	26.7	33.3	53.3	53.3	40.0	40.0	26.7	40.0	13.3	20.0	13.3	60.0	53.3	20.0		0.0
20	1																				

＊縦軸の選択肢を選んだ人が、他の選択肢を選ぶ割合を示している。例えば、1を選んだ人のうち 21.2%が2を選択している。

【表2】「大学生が重要だと思う国語力」分野ごとの選択傾向

■文系

所属	人数		必要な国語力																			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
社会	4	人数	0	3	2	0	2	1	1	1	1	4	0	2	1	1	1	0	0	0	0	0
		%	0.0	75.0	50.0	0.0	50.0	25.0	25.0	25.0	25.0	100.0	0.0	50.0	25.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人間	14	人数	3	4	6	1	5	3	3	0	5	12	6	7	3	2	0	7	2	0	0	0
		%	21.4	28.6	42.9	7.1	35.7	21.4	21.4	0.0	35.7	85.7	42.9	50.0	21.4	14.3	0.0	50.0	14.3	0.0	0.0	0.0
人文	26	人数	4	14	9	2	8	6	6	7	11	16	9	11	2	7	0	7	7	1	0	0
		%	15.4	53.8	34.6	7.7	30.8	23.1	23.1	26.9	42.3	61.5	34.6	42.3	7.7	26.9	0.0	26.9	26.9	3.8	0.0	0.0
日・日	17	人数	2	8	4	1	5	5	8	5	4	11	9	9	1	6	1	10	3	1	2	0
		%	11.8	47.1	23.5	5.9	29.4	29.4	47.1	29.4	23.5	64.7	52.9	52.9	5.9	35.3	5.9	58.8	17.6	5.9	11.8	0.0
比文	10	人数	0	4	2	0	3	2	4	1	3	7	7	5	0	2	2	3	2	3	0	0
		%	0.0	40.0	20.0	0.0	30.0	20.0	40.0	10.0	30.0	70.0	70.0	50.0	0.0	20.0	20.0	30.0	20.0	30.0	0.0	0.0
国際	1	人数	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0
		%																				
図書館情報	1	人数	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
		%																				
全体	73	人数	9	39	27	4	26	21	26	15	29	59	40	43	7	22	6	32	16	8	2	0
		%	12.3	53.4	37.0	5.5	35.6	28.8	35.6	20.5	39.7	80.8	54.8	58.9	9.6	30.1	8.2	43.8	21.9	11.0	2.7	0.0

■理系

所属	人数		必要な国語力																			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
工学システム	4	人数	1	3	2	0	1	2	0	0	3	4	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0
		%	25.0	75.0	50.0	0.0	25.0	50.0	0.0	0.0	75.0	100.0	0.0	25.0	0.0	25.0	0.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0
自然	50	人数	9	19	14	4	13	17	18	11	17	28	14	28	17	12	5	16	11	4	0	0
		%	18.0	38.0	28.0	8.0	26.0	34.0	36.0	22.0	34.0	56.0	28.0	56.0	34.0	24.0	10.0	32.0	22.0	8.0	0.0	0.0
生物	7	人数	2	2	4	0	1	4	2	1	2	7	2	3	3	1	0	0	0	0	1	0
		%	28.6	28.6	57.1	0.0	14.3	57.1	28.6	14.3	28.6	100.0	28.6	42.9	42.9	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0
生物資源	3	人数	0	0	2	0	0	1	2	0	1	2	1	2	1	0	1	2	0	0	0	0
		%	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3	66.7	0.0	33.3	66.7	33.3	66.7	33.3	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0
全体	64	人数	12	24	22	4	15	24	22	12	23	41	17	34	21	14	6	19	12	4	1	0
		%	18.8	37.5	34.4	6.3	23.4	37.5	34.4	18.8	35.9	64.1	26.6	53.1	32.8	21.9	9.4	29.7	18.8	6.3	1.6	0.0

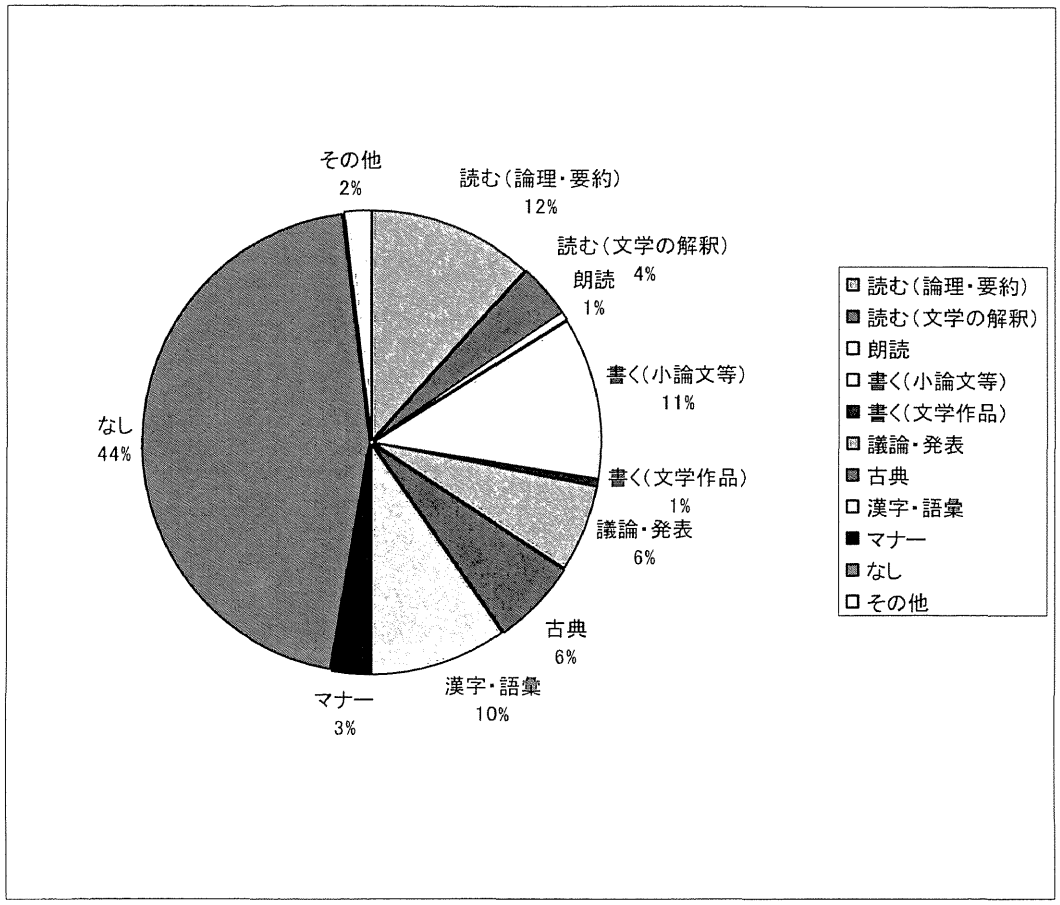
■芸術系

所属	人数		必要な国語力																			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
芸術	54	人数	15	13	21	3	13	27	16	15	23	28	12	33	3	9	4	23	9	1	2	1
		%	27.8	24.1	38.9	5.6	24.1	50.0	29.6	27.8	42.6	51.9	22.2	61.1	5.6	16.7	7.4	42.6	16.7	1.9	3.7	1.9

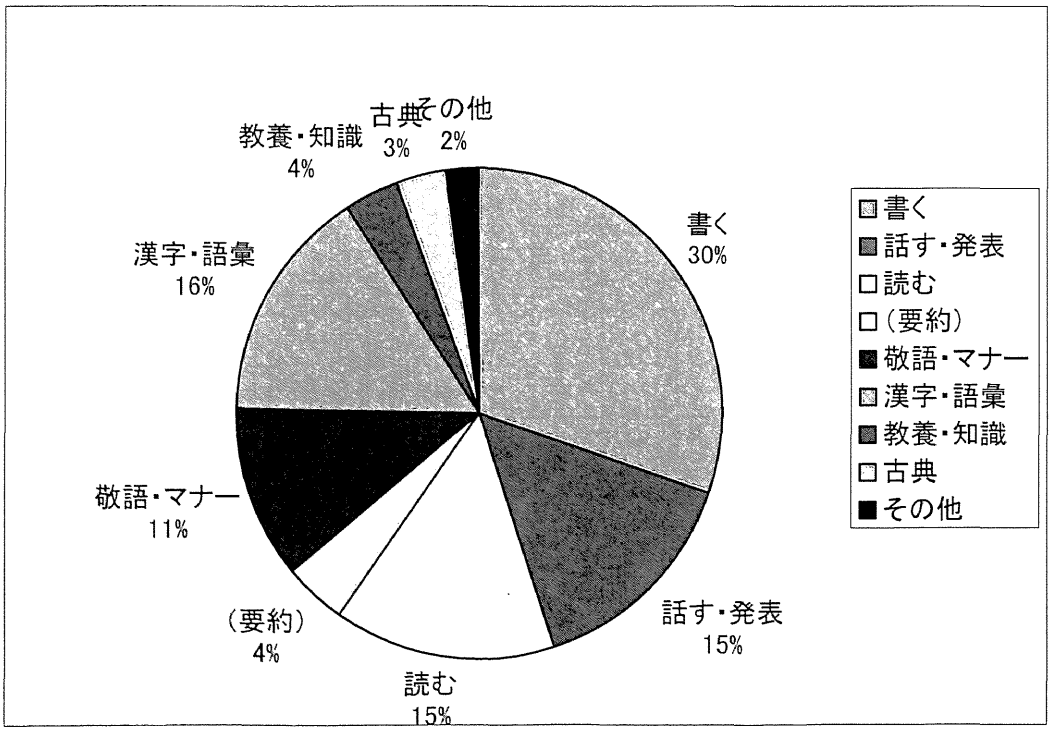
■体育系

所属	人数		必要な国語力																			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
体育	102	人数	16	19	45	3	38	21	50	36	39	55	30	59	11	16	8	51	28	3	10	0
		%	15.7	18.6	44.1	2.9	37.3	20.6	49.0	35.3	38.2	53.9	29.4	57.8	10.8	15.7	7.8	50.0	27.5	2.9	9.8	0.0

【図2】役に立った国語の授業



【図3】やってほしかった国語の授業



【表3】「役に立った授業」「やってほしかった授業」分野別傾向

■文系

所属	人数		役に立った国語の授業											やってほしかった授業								
			読む(論理・要約)	読む(文学の解釈)	朗読	書く(小論文等)	書く(文学作品)	議論・発表	古典	漢字・語彙	マナー	なし	その他	書く	話す・発表	読む	要約	敬語・マナー	漢字・語彙	教養・知識	古典	その他
社会	4	人数	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1
		%	0.0	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0
人間	14	人数	2	1	0	1	1	1	0	0	0	7	1	9	3	1	0	2	2	2	0	1
		%	14.3	7.1	0.0	7.1	7.1	7.1	0.0	0.0	0.0	50.0	7.1	64.3	21.4	7.1	0.0	14.3	14.3	14.3	0.0	7.1
人文	26	人数	6	0	0	4	0	0	2	2	1	10	0	6	4	3	1	3	3	0	2	2
		%	23.1	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	7.7	7.7	3.8	38.5	0.0	23.1	15.4	11.5	3.8	11.5	11.5	0.0	7.7	7.7
日・日	17	人数	1	1	0	2	0	0	2	0	0	10	0	9	4	1	1	1	1	1	0	1
		%	5.9	5.9	0.0	11.8	0.0	0.0	11.8	0.0	0.0	58.8	0.0	52.9	23.5	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	0.0	5.9
比文	10	人数	2	0	0	2	0	0	1	0	0	5	0	4	2	1	1	0	1	1	1	1
		%	20.0	0.0	0.0	20.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0	50.0	0.0	40.0	20.0	10.0	10.0	0.0	10.0	10.0	10.0	10.0
国際	1	人数										1		1	0	0	0	0	0	0	0	0
		%																				
図書館情報	1	人数	1											1	0	0	0	0	0	0	0	0
		%																				
全体	73	人数	15	2	0	14	1	1	6	2	1	40	1	36	15	10	4	6	8	5	4	7
		%	20.5	2.7	0.0	19.2	1.4	1.4	8.2	2.7	1.4	54.8	1.4	49.3	20.5	13.7	5.5	8.2	11.0	6.8	5.5	9.6

■理系

所属	人数		役に立った国語の授業											やってほしかった授業								
			読む(論理・要約)	読む(文学の解釈)	朗読	書く(小論文等)	書く(文学作品)	議論・発表	古典	漢字・語彙	マナー	なし	その他	書く	話す・発表	読む	要約	敬語・マナー	漢字・語彙	教養・知識	古典	その他
工学システム	4	人数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0
		%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	75.0	25.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
自然	50	人数	2	2	0	3	0	4	2	5	0	36	0	8	5	6	2	5	2	2	3	1
		%	4.0	4.0	0.0	6.0	0.0	8.0	4.0	10.0	0.0	72.0	0.0	16.0	10.0	12.0	4.0	10.0	4.0	4.0	6.0	2.0
生物	7	人数	1	0	0	2	0	1	0	0	1	3	0	2	2	1	0	1	0	0	0	0
		%	14.3	0.0	0.0	28.6	0.0	14.3	0.0	0.0	14.3	42.9	0.0	28.6	28.6	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0
生物資源	3	人数	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
		%	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	33.3	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0
全体	64	人数	4	2	0	5	0	5	2	5	2	43	1	13	7	7	2	6	3	2	3	1
		%	6.3	3.1	0.0	7.8	0.0	7.8	3.1	7.8	3.1	67.2	1.6	20.3	10.9	10.9	3.1	9.4	4.7	3.1	4.7	1.6

■芸術系

所属	人数		役に立った国語の授業											やってほしかった授業								
			読む(論理・要約)	読む(文学の解釈)	朗読	書く(小論文等)	書く(文学作品)	議論・発表	古典	漢字・語彙	マナー	なし	その他	書く	話す・発表	読む	要約	敬語・マナー	漢字・語彙	教養・知識	古典	その他
芸術	54	人数	10	3	1	5	1	7	7	5	4	17	1	18	7	8	2	4	7	1	2	1
		%	18.5	5.6	1.9	9.3	1.9	13.0	13.0	9.3	7.4	31.5	1.9	33.3	13.0	14.8	3.7	7.4	13.0	1.9	3.7	1.9

■体育系

所属	人数		役に立った国語の授業											やってほしかった授業								
			読む(論理・要約)	読む(文学の解釈)	朗読	書く(小論文等)	書く(文学作品)	議論・発表	古典	漢字・語彙	マナー	なし	その他	書く	話す・発表	読む	要約	敬語・マナー	漢字・語彙	教養・知識	古典	その他
体育	102	人数	10	5	1	13	0	6	5	18	2	47	3	16	11	14	3	12	22	3	0	1
		%	9.8	4.9	1.0	12.7	0.0	5.9	4.9	17.6	2.0	46.1	2.9	15.7	10.8	13.7	2.9	11.8	21.6	2.9	0.0	1.0